

第十課

わたしに何をしてほしいのか

祈りは明確でなければならない

「そこでイエスは、さらにこう言われた。『わたしに何をしてほしいのか。』」

(マルコ一〇・五一、ルカ一八・四一)

目の不自由なその男は、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください」と叫び続けました。その叫び声はイエスに達しました。イエスは男の求めが何であるかを御存知で、すぐにもその求めをかなえるつもりでおられたのです。しかし、そうする前に、男にこうお尋ねになりました。「わたしに何をしてほしいのか。」あわれみを求めるただの願いごとではなく、その男が欲しているものを、その口で言い表すのを聞きたいと思われたのです。それを言うまで、男はいやされませんでした。

主は、今日でも、多くの嘆願者に同じ質問をなさいます。その人たちは、その答をしないうちは、求めるものを得られません。私たちの祈りは、あわれみを求める漠然とした訴えであった

り、祝福を求める毅然としない叫びではなく、必要なものをはっきり求める明確な表現でなければなりません。主の愛に満ちた心が、私たちの叫びを理解できなかったり、聞く用意ができていないというわけではありません。主がそれを求められるのは、私たちのためなのです。そのような明確な祈りは、自分自身の必要をもっとよく自分に教えてくれます。自分が一番必要としているものは何かを見出すには、時間と考えと吟味が要求されます。それによって、自分自身が探られ、自分の願いがまじめで真実なものかどうか、忍耐して待つことができるものなのかどうかを試されます。自分の求めが神のみことばにかなったものであるのかどうか、自分の求めているのは与えられるのだと本当に信じているのかを判断させられます。また、私たちを助けて、特別な答を待たせ、答が与えられた時、それに注意させるようにするものです。

しかし、私たちの祈りは、なんと漠然としていて要領を得ないものでしょうか。あわれみを求めても、何のためにあわれみを求めているのかを知らうとしません。罪から救われたいと願っても、救われたいと願っている罪の名をあげようとはしません。自分の周囲の人々に神の祝福があるように、自分の国や世界のために神の御霊が注がれるようにと祈ります。しかし、自分がそこでなさうとする特別な働きのあるわけでもなく、答を期待しているわけでもありません。主は言われます。「あなたは何を本当に求めているのか。わたしに何を期待しているのか。」クリスチャンは皆、制限された力しか持っていない。その働きの場も一定の所に限られています。祈

りにおいても同様です。信者は皆自分の仲間、自分の家族、自分の友人、自分の隣人を持っています。もし信者がその中の一人、あるいはそれ以上の人の名をあげて祈るなら、それによって自分が信仰の訓練学校へ導かれ、神に対し、個人的な、要点的はっきりした願いを申し上げることができるようになります。もし私たちがこのようにはっきりした問題において、信仰による答を得られたら、更にもっと一般的な祈りもまた信仰を持ったものとなって、効果を見ることができでしょう。

マユバで、訓練を積んだ兵士たちがボーア人に撃退させられたことを聞いて、文明諸国の人々は驚きました。なぜボーア人たちは勝ったのでしょうか。ヨーロッパの軍隊では、群をなしている敵兵に向かって銃を撃つが、一発一発ねらい撃ちするというようなことは考えません。しかし、ボーア人は狩猟によって特別の訓練を受けていたので、一発必中が大切であることを知っていました。ねらう相手を見定めて、それに向かって撃ち込んだのです。そのように、目標を定めるといことは、霊の世界においても必ず勝を得る方法です。たくさん願いごとを次から次に出し、その一つ一つについて答を得るといふ目的と期待を持っているかどうかを確かめる余裕がないとすれば、その祈りは、的に届かないでしょう。しかし、心を静めて主の前にこうべを垂れ、次のように自問したとしましょう。「私は本当は何を求めているのだろうか。答を期待して、信仰を持って求めているのだろうか。それを御父のみむねにゆだねることができるのか。答を得る

ということが、神と私との間で納得されたこととなっているのか」と。こうして祈ることを学ぶなら、神はそれを聞いてくださり、自分も期待していることを知るようになるでしょう。

主が、ことば数が多ければ聞いてもらえると考えている異邦人のむなしい祈りについて警告なさったのは、このためです。私たちはよく、熱心な、力のこもった祈りを聞くことがあります。その祈りではおびただしい数の願いがささげられます。主はそれに対してきつとこうお答えになるに違いありません。「あなたはわたしに何をしてほしいのか。」

私が、父の商用で外国に出かけたとします。そこで私はきつと二種類の手紙を書くでしょう。愛を伝える私信と、注文を伝える業務用の手紙です。両方を含んだ手紙もあるでしょう。手紙に對する返事が来ます。家族のことを書いた私信については返事を期待してなくても、注文書には返事を期待するはずで、注文した品が送られて来ることに、知らなければなりません。神との對話においても、この商用的要素が欠けてはいけません。私たちは、自分の必要、罪、愛、信仰、献身を表明すると同時に、私たちが求め得ようとしているものを明確に表明しなければなりません。そうするなら、御父は、喜んでそれを認め、受け入れたことを証明してください。主のみことばは、それ以上のことを教えています。主は、「何を望むか」とは言わず、「何をしたいのか」と言われました。人はしばしば、はっきり求めるのではなく、ただそうやってほしいと思っただけにすぎないのです。ある品物がほしいと思います。しかし、値段が高すぎます。

そこで買うのをあきらめます。ほしいと思うけれど、ぜがひでもとは思っていないのです。不精者は、金持になりたいとは思うのですが、そのようにしません。多くの人は、救われたいと思っていますが、ぜがひでもとは思っていないので滅びてしまいます。意志は、心と全生涯を支配するものです。自分の手の届く所にあるものをぜひほしいと思うなら、それを得るまで決して落着かないものです。そのように、イエスは私たちに、「何をしてほしいのか」と言われる時、どんな価を払ってもほしいのか、どんな犠牲を払っても手に入れようとしているのかと、尋ねておられるのです。あなたは、何としてもそれがほしいのですか。答が遅くなっても、聞いてくださるまで平安でおられますか。ああ、なんと多くの祈りが、ただ一度の願いごとで終ってしまい、しばらくすると忘れられてしまうことでしょう。あるいはまた、年々歳々、お義理のように祈りがささげられ、答のないまま満足されてしまっていることでしょう。

しかし、次のような疑問が起るかもしれません。私たちの願いを神に知っていただき、自分の意志を通そうとせず、何が最善であるか神に決めていただくのが一番よいのではないかということとです。決してそうではありません。このことは祈りの本質そのものであって、イエスはそのために弟子たちを訓練されたのです。それは単に、願いごとを神に知っていただき、決定はお任せするといったものではありません。そのような祈りは、神のみこころはどうせ知り得ないのだとする敗北の祈りとなってしまいうでしょう。しかし、みことばの約束の中に神のみこころを見出す

うとする信仰の祈りは、答が与えられるまで求めてやまないものです。マタイによると、イエスは、目の不自由な男に、「わたしにそんなことができるかと信じるのか」とお尋ねになり（九・二八）、マルコによると、「わたしに何をしてほしいのか」と尋ねておられます。主は、いずれの場合も、信仰がその男を救ったと言われました。主は、スロ・フェニキヤの女に対しても、「あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように」と言われました。信仰とは、神のみことばに信頼して、どうしてもそれをいただきたいと言う意志の決心にはかならないのです。本当に信じるということは、堅い意志をもって願うことです。

しかし、そのような意志は、神によりたのんだり服従したりすることと矛盾するのではないでしょう。決してそんなことはありません。それはむしろ、神を尊ぶ本当の服従です。子は、自分の意志を完全に御父に明け渡して初めて、自分が得たいと思うものを求める自由と力を御父から与えられます。神の子である信者が、みことばと御霊によって明らかにされた神のみところを自分の意志をもって受け入れるならば、この新しくされた意志を奉仕の中で用いることは、神のみところになうことになります。意志は、たましいにおける最高の力です。恵みは、何よりも、神のかたちの主要な特色の一つであるこの意志をきよめ、修復し、これを自由に用いさせようとするものです。父のためにのみ生き、自分の願いではなく父の意志のみを求める息子は、父の仕事に任ぜられます。同じように、神はその子たちに真剣に語られます。「わたしに何をしてほし

いのか」と。神のみこころを求めることをめんどろに思ったり、信仰によって与えられたと宣言する時の心の戦いを恐れて、自分は何も求めないということは、謙遜を装った、靈的怠惰だと言われかねないものです。本当の謙遜は強い信仰を伴うものであり、みどころにかなうものだけを求めるものです。そして、「何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます」という約束の成就を大胆に宣言します。

主イエスよ。心を尽し、力を尽して祈ることを教えてください。そうすれば、自分が求めるものについて、あなたに対しても、自分に対しても疑いをはさむ余地がなくなるでしょう。自分が求めているものを知ることができれば、天において記されているように、私はその求めをこの地上においても記します。それで、答が与えられるごとにそれを知ることができるよう。あなたのみことばの約束に対する自分の信仰がはっきりすることによって、御霊が自分のうちに実際に働いて、必ず与えられるものを求める自由を与えてください。主よ。効果的な祈りの働きのために、私の意志を新たにし、強め、聖別してください。

恵み深い救い主よ。私たちに自分のほしいものを言うようにお命じになり、また、求めるものをかなえると約束してくださる驚くべきあなたの謙遜を、私にお示してください。神の御子よ。私

恵み深い救い主よ、私に示してください。神の御子よ、私をかなえろと約束してください。驚くべきあなたの謙遜を、私にお示してください。

には理解できません。あなたがあなた御自身のために私を全く贖い、私たちの意志を最も尊いものとして、あなたの有能なしもべとしておられることを、私はただ信ずるのみです。主よ、私は決してそれにふさわしい者ではありませんが、あなたの御霊によって、私の全存在を支配していただけるように、私の意志をあなたにおささげします。御霊が、私の意志を支配し、あなたの約束の真理へと導き、祈りの時に、その意志を強く働かせて、「あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように」という、あなたの御声を聞く者とならせてください。アーメン。